

特集

農村と都市を結ぶ地域づくり

現在、国際的にはTPPに象徴されるような新自由主義経済の動向が趨勢となる中で、3・11以降の東北復興の課題と深刻さを増す福島原発問題は、我が国の矛盾を浮き彫りにしているのではないのでしょうか。しかし、「少年H」や「風たちぬ」は、こうした世相の中でも人が生きる様を鮮やかに表しているように思います。

これは、明日への希望や未来の方向性を見出すことが困難な状況においても、脈々と農村と都市の「新たな絆」(小橋)により持続的な農山漁村地域が、人々への価値観の問い直し、地域で生活する大切さ、多様な人々との連帯といった豊かな実践によって創出されていることを想起させます。

これまで協同総合研究所では、実践的・研究的に農村と都市を結ぶ架け橋をつくりだしてきました。例えば「菜の花プロジェクト」、「田舎で働きたい」、「農業ネットワーク会議」を経て農業・農村に凝縮されている人々の英知に学び、そのあたたかさに包まれながら、多様な働く人々が成長する契機に出会うことができました。こうした実践・研究の広がりや深まりは、協同をテーマに「地域が支える農業」(島田)の提起にもつながりました。また、再生可能エネルギーの研究は地域システムの活性化に向けて様々な主体の参画の場や地域経済循環を生み出すきっかけを明らかにしています。

こうした成果をふまえながら、一層の農村と都市の連携について12月号では特集しています。協同をテーマに農村と都市がつながることによって、人々の豊かな関係性が広がる結節点が生まれ、地域の産業活性化、さらには地域づくりに向けた動向の深化を見たいと考えました。そこには、従来の農村と都市の関係から若者が農村へ大移動をはじめ、多くの人が農山漁村での新たな生業を創造することで、人々が地域に根づいていく時代の姿を垣間みることができるでしょう。(編集部)